

寒川町立南小学校

研究テーマ：自分の考えを持つ・広げる・深める ～考えの“ずれ”を通して～

1 実践の目的

昨年度は「自分の考えを持つ」ことに重点を置き、児童全員が自分の考えを持ち対話に参加できるよう手立てを検討した。対話を充実させるために「自分の考えを広げる」ことに焦点を当て、考えの“ずれ”を通して対話を促し、児童の考えを広げる授業づくりを進めることとした。

2 実践の内容

(1) 研究授業・研究協議会の概要

年間で、各学年2回、研究授業を行った。

(1年生)

単元前半では具体物の準備や場面の視覚化、用語確認を行い、登場人物の行動を想像するために動作化を繰り返した。これにより、子どもたちは登場人物の気持ちを想像し、自分の考えを持つことができた。また、考えを広げる場面では意見を整理して板書し、1年生にとって考えの違いを理解するための有効な手立てとなった。

(2年生)

教科書の本文をモニターで確認し、線を引いた箇所を全体で振り返ることができた。名前マグネットで意見の違いを可視化し、児童は友達の意見を聞きたいという意欲を持ち、意見交流が促進された。児童は友達の発言に反応し、自分の意見と比較して聞く姿勢が育まれてきた。

(3年生)

児童は物語を読む際に登場人物の行動や気持ちに着目し、線を引いて考えることが

できるようになった。教師が求めなくても心情曲線を描きたがる姿勢が見られ、言葉に着目することも自然になった。考えを持ち、共有する方法が定着し、名前マグネットを使って意見を明示する姿勢が積極的になった。児童は「意見が違っていい」「前の意見が変わってもいい」と意識し、物語ノートで学びをつなげることが効果的だった。教師は児童の考えが深まる発問を意識して行うようになった。



(4年生)

単元計画において、本文を読み取る時間と深く考える時間を明確に分け、児童が飽きずに取り組むことができた。また、時系列に沿った学習方法が理解しやすく、推理や登場人物の関係性を深く読み取ることができた。「考えを持つ」や「考えを広げる」ことにも焦点を当て、児童の考えの変容が見やすく、次回の授業改善に役立った。

(5年生)

円グラフを使用して綾の心情の変化を整理し、児童の考えを可視化することができた。項目や割合の違いから“ずれ”が生まれ、児童は友達の考えを聞きながら、交流後に考えを広げる様子が見られた。前時に考えを書く時間を確保したことで、交流時に多くの児童が話し合いを行い、根拠に基づいて意見を述べる児童が増えた。考えを整理する時間が交流を充実させるために重要だと感じた。



(6年生)

児童が自分の意見を発表し、意見の“ずれ”を視覚的に捉えるために板書に整理することに力を入れた。事前の板書計画と教師のまとめ力が重要であると感じた。意見交換では、全体交流の時間が長くなることを避けるため、グループ活動を長く設定し、少人数での活発な交流を促進した。ただし、全体交流のバランスも重要だと感じた。グラフの設定や意味の整理が必要だと感じた。

(2) 講演会について

山梨大学教授の茅野政徳先生を招聘し、年3回講演会を開催した。

6月10日には、茅野先生に4年生で授業を1時間していただき、“ずれ”から考えを広げ、深める授業づくりについて講演していただいた。

10月9日には、考えを広げるから深め

る授業づくりについて講演していただいた。考えを深める子ども姿と具体について、理解を図った。

2月7日には、考えを深めるための授業づくりについて講演していただき、授業技術の向上を図った。



3 実践の成果と課題

児童が考えを“もつ”ための授業づくりが積み重なり、系統的な国語の学びを意識した授業が実現した。物語文を読む力が育まれ、児童が自信を持って考えを発表し、対話を通じて考えを“広げる”姿が見られるようになった。授業では、名前マグネットやグラフで“ずれ”を可視化し、児童が進んで考えを交流するようになった。ただし、考えを“広げる”ためには課題設定や情報量の絞り込みが必要で、考えを“広げる”と“深める”のセットでの授業づくりが重要だと感じた。今後は、児童が考えを再構築できるような手立てを検討し、授業者と参観者で具体的なイメージを共有して授業に臨みたい。

4 今後の展開

これらの課題を解決するためには、授業の中で起こる子どもの“ずれ”を予測し、見通しを持って単元計画を作成する必要があると感じた。今後の授業検討の際に意識して行っていきたい。